

# SHOW HEY シネマルーム

★★★

## フランコフォニア ルーヴルの記憶

2015年・フランス、ドイツ、オランダ映画  
配給/キノフィルムズ・88分

2016 (平成28) 年 10 月 20 日鑑賞 | ビジュアルアーツ大阪試写室

### Data

監督: アレクサンドル・ソクーロフ  
出演: ルイ＝ド・ドゥ・ランクザン  
/ベンヤミン・ウツェラー  
ト/ヴィンセント・ネメス/  
ジョアンナ・コータルス・ア  
ルテ/アレクサンドル・ソク  
ーロフ

### ■ショートコメント■

◆私はイギリスの大英博物館を1988年のヨーロッパ旅行の際に少しだけ見学したが、フランスのルーヴル美術館は1度も訪れたことがない。「ルーヴルのないフランスは必要なのか?」とまで言われる、ルーヴル美術館の価値とは一体ナニ?

ルーヴル美術館の前身はフランス王の宮廷。1682年にルイ14世が宮廷をヴェルサイユ宮殿に移したことによって、ルーヴル宮殿は芸術家たちの住居兼アトリエとされ、1793年に「中央美術博物館」「ルーヴル宮殿」の一部として一般公開されたそう。本作には、美術品を前に「これも自分が集めてきたものだ」と自慢げに語るナポレオン1世(ヴィンセント・ネメス)の(亡霊)や「自由、平等、博愛」と何度もくり返す、フランス共和国の擬人化されたイメージでフランス共和国の象徴である女性マリアンヌ(ジョアンナ・コータルス・アルテ)の(亡霊)が登場するが、そんな演出をしたのは、ロシアの巨匠アレクサンドル・ソクーロフ監督。私は同監督の代表作である『太陽』(05年)を観ておらず、観たのは『ファウスト』(11年)、『シネマルーム29』未掲載)だけだが、そんな演出のユニークさにビックリ!

◆ヒトラーが美しいパリのまちやルーヴル美術館の美術品を愛した(狙った)ことは有名。それをテーマにした近時の映画が、『黄金のアデーレ 名画の帰還』(15年)、『シネマルーム37』261頁参照)、『ミケランジェロ・プロジェクト』(13年)、『シネマルーム37』267頁)等だ。ルーヴル美術館はナポレオンによる各地からの収集(略奪?)と返還、そしてヒトラーによる略奪を防ぐための移送、という2つの大きな転機を経て今日に至っているが、それは激動の歴史だ。

本作にナポレオン1世とマリアンヌを登場させたのはアレクサンドル・ソクーロフ監督のアイデア。それに対して、第二次世界大戦中にルーヴル美術館長としてナチスのパリ到着前に芸術作品の避難を計画したジャック・ジョジャール(ルイ＝ド・ドゥ・ランクザン)と、第二次世界大戦中、芸術保護を目的としてナチス・ドイツからルーヴルに派遣された

ヴォルフ・メッテルニヒ伯爵（ベンヤミン・ウツェラート）を登場させ、第二次世界大戦中のルーヴルとその中の美術品について縦横に語らせているのはすべて現実だから、超リアルだ。本作はその冒頭から、荒れ狂う海の上にいる船と何とか通信を図ろうとするナレーションから始まるからその演出にもビックリさせられるが、「記憶の迷宮」への旅をするためにはこれくらいの演出が必要かも・・・。

◆私は去る8月28日に、中之島にある国立国際美術館で開催中の「始皇帝と大兵馬俑」を見学した。2001年8月に中国の西安旅行に行き、ホンモノの「兵馬俑」を丸1日かけて見学した時はただただその壮大さに圧倒されただけに、中之島の美術館での見学に大きな期待はしていなかったが、そのごく1部だけを小綺麗に展示した「始皇帝と大兵馬俑」もなかなかのものだった。

パリのルーヴル美術館と中之島の国立国際美術館を対比させるのは論外だが、スクリーン上で観るだけでもルーヴル美術館に収められている美術品の数々はすごいものだ。もっともルーヴル美術館に1度も行ったことのない私は、モナリザやミロのヴィーナスくらいしか知らないが、スクリーン上にはそれ以外の美術品が次々と登場！一番いいのは現地に行つてそれらを一人静かに鑑賞することだが、ルーヴルまで行くのは大変なことを考えれば、ルーヴルの「記憶の迷宮」へ旅をし、ナポレオン1世やマリヤヌのコメントを聞きながらそれらを鑑賞するのにも一興だ。

◆『キネマ旬報』11月上旬号には「天才・ソクーロフの“あまりにロシア的な”ヴィジョン『フランコフォニア ルーヴルの記憶』と題して、①川口敦子氏の「インタビュー アレクサンドル・ソクーロフ [監督] 和の心の痛み、真の痛みというもの、それはどうしてもロシアと結びれている」と②「ルーヴル美術館のさまよい」と題する、海野弘氏の作品評が掲載されている。

前者は川口敦子氏がイタリアにいるアレクサンドル・ソクーロフ監督に対して電話でインタビューしたもののだが、そこでは同監督の本作への思いが存分に語られているから、私たち普通の日本人がスクリーン上だけでは理解できない本作の奥深さを知ることができる。私は本作をソクーロフ監督のルーヴル美術館に対するイメージや感性だけでつくられたものと思っていたが、そこで同監督が「当り前の一本の映画というものに在り方にそうやって揺さぶりをかける時空は『考え抜いて構成されたもの。どこまでも意識的です。ふと詩想が湧くといったのとは違う、どう繋いだら語りたいたいことが増幅していくか熟考した結果』と語っているのは意外だった。そもそも、ロシアという国自体が日本人にはわかりにくい国なのだから、「ロシアの鬼才」が考えることが日本人にわかりにくいのは当然かもしれないが・・・。

また、海野弘氏の作品評は①ソクーロフの内的対話②19世紀を20世紀に重ねた<時>③ヨーロッパの見た夢、の3つに分類して解説しているが、なるほど、なるほど。スクリーン上で私が観て感じただけのものとは全然レベルの違う分析がされていることがよくわかる。本作をイメージだけで理解し「ああ、面白かった」と思うだけでは物足りない方

は、是非この2つの記事を読んでもらいたい。

2016（平成28）年10月25日記